原爆の図 丸木美術館ニュース

編集・発行　公益財団法人 原爆の図 丸木美術館
〒355-0076　埼玉県東松山市下唐子1401
TEL 0493-22-3266 FAX 0493-24-8371
【郵便振替】00150-3-84303
【原爆の図保存基金（郵便振替）】00260-6-138290
【ウェブサイト】https://marukigallery.jp
【E-mail】info@marukigallery.jp

これは、一点一点、小さな一本の線のゆれ方まで、やっぱりおばあちゃんの体から出る線だし、点なのでした。八十年間書かず描かず眠り続けていた感覚が醒めて、そうして八十年の実生活の体験を生かして描いているのです。

（丸木位里、赤松俊子「私の母 私の姑」、『丸木スマ画集』一九五四年、大塔書店）

みのりの秋　丸木スマ　1951年（1952年 第６回女流画家協会展出品）　原爆の図丸木美術館蔵

第143号

国や世代の境界を越えて　丸木美術館の国際的な情報発信と寄付活動 …… p.2
「マンスリーサポーター」を募集します …… p.4
『妣たちの国へ　原爆の図2020（仮題）』――「原爆の図」バーチャルツアー映像製作中 …… p.5
丸木夫妻の作品を未来に伝える ――保存修復の必要性（後藤 秀聖）…… p.6
連載第9回　位里のこと、俊のこと（丸木 ひさ子）…… p.7
連載第36回　丸木位里・丸木俊の時代　日ソ中立条約締結／条約締結パーティ（岡村 幸宣）…… p.8
新評議員・理事・監事選任のお知らせ …… p.10
丸木美術館情報ページ／リレーエッセイ 第73回（飯島 啓史）…… p.11
写真で見る丸木美術館の日常風景（山口 和彦）…… p.12

赤松俊子とモスクワ 1937-1941　開催中～10月25日（土）　※会期を変更しました
内田あぐり VOICES いくつもの聲　11月7日（土）～2021年1月24日（日）

国や世代の境界を越えて

丸木美術館の国際的な情報発信と寄付活動

昨年より取り組んでいる国際的な情報発信と寄付活動は、丸木美術館の運営体制に変化を生みつつあります。九月一六日に開催されたオンラインによる国際平和博物館会議のレポートをもとに、丸木美術館の活動の近況をお伝えします。

◆概要

丸木美術館では、昨年から国際的な情報発信と寄付活動における新しい取り組みを行ってきました。インターネットメディアなどを活用し、国内外への発信を強化することで、従来の支援者に加えて新たな層の人たちに「原爆の図」を知ってもらい、美術館に対する支援基盤を拡大することが目的でした。

今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響により、四月九日から六月八日まで二カ月間臨時休館となりましたが、その状況を逆に生かすことができたのも、新たな取り組みの成果であったと言えるでしょう。こうした動きについて、具体的に報告いたします。

◆背景

一九六七年に開館した丸木美術館は、行政や企業の補助を受けず、一般の人びとの支援によって運営されてきました（二〇二〇年現在、美術館の支援会員は約一五〇〇人）。しかし支援者層は徐々に高齢化し、広報や寄付システムも新たなテクノロジーへの対応の遅れが課題となっていました。運営資金が常に少なく、少数の職員では変革に必要な労力と時間を捻出できないという問題も抱えていました。

しかし近年、さまざまな企画などの活性化が好影響をもたらし、若い世代の関心も増加しつつあります。そうした状況の変化を背景に、運営業務の部分委託を試みることが可能になってきています。

◆構造

現在は学芸員一名（岡村幸宣）、事務職員二名（山口和彦、田中実花子）を中心に、事務作業を地元のボランティア二名（浜地稔、中島一垂代）がサポートしています。

米国の寄付サイト「GlobalGiving」で「原爆の図」バーチャルツアー映像製作への寄付を呼びかける

昨年からは、広報寄付活動をファンドレイザー（浅井美絵）と国際コーディネーター（岩﨑由美子）に委託し、寄付システムの改良や広報の提案を受けています。また、ウェブデザイナー（久保田涼子）が新たなデザインの日英版ウェブサイトを作成しました。さらに非常勤の特任研究員（後藤秀聖）が調査研究、作品修復などを目的とした各種助成を獲得しています。

そして写真家・映像作家の新井卓を中心とした映像製作チームが「原爆の図」紹介映像を撮影中。これらの活動を専務理事として岡村が統括し、評議員、理事、監事に報告・連携しつつ運営に当たっています。

◆具体的活動

①美術館ホームページの刷新

全体的にデザインを刷新し、英語の情報を充実させました。また、スマートフォン対応にして、オンライン寄付サイトや動画配信へのリンクや、SNSとの連携を強化しました。

ホームページのQRコードがついた広報印刷物も活用しています。

②オンライン寄付サイトの立ち上げ

従来の寄付募集は国内向けで、郵便振替が中心でしたが、オンライン寄付サイトを立ち上げたことにより、クレジットカード入金（国外からの寄付も可能）、銀行振込の申し込みができるようになりました。

寄付の募集は、美術館改築と作品保存を目的とした長期的な「原爆の図保存基金」と、コロナ禍による臨時休館に対する短期的な「緊急支援」の二本を立ち上げました。

オンラインの効果としては、「原爆の図」や丸木美術館を知らなかった新たな層に浸透したことが挙げられます。外出が困難な時期にあって、携帯電話からも寄付ができる利便性は絶大な効果を発揮しました。

「緊急支援」は六月末の締め切り後も入金が続き、九月一三日現在で四九八六件、六八五四万一五九円が集まりました。

なお、二〇一七年五月から行っている「原爆の図保存基金」も九月二五日現在で五八四九件、一億三八〇三万五二七六円に達しています。

③SNSや映像動画の活用

臨時休館中に迎えた五月五日の開館記念日には、寄付の御礼を兼ねたメッセージ動画をフェイスブックとユーチューブ、ホームページで公開しました。スマートフォンで撮影した簡易な動画でしたが、フェイスブックの閲覧数が一万五〇〇〇件を超えるなど大きく拡散されて、「緊急支援」の増加につながりました。

また、八月六日のひろしま忌、八月九日のながさき忌にも、新井卓の撮影編集により、日英字幕をつけた動画を配信しました。

現在は、クラウドファンディングで集めた資金を活用して、「原爆の図」紹介映像を作成中です（二〇二一年はじめに公開予定）。

SNSは、フェイスブック、ツイッター、インスタグラムを使用しています。SNSからのメッセージ等への対応や、情報発信の担当者も増やしつつ、投稿の頻度を増加し、内容によっては日英併記で投稿するように工夫しています。その結果、アクセス数、フォロワーとも着実に増加しています。

④海外へのアプローチ

英語圏への発信の機会を増加するため、これまで培ってきた海外とのコネクションをつなぐメーリングリストを作成しました。

今回の一連の活動は、海外向け英語メディア（NHK国際放送や共同通信など）に取り上げられ、映画監督のジャン・ユンカーマンさん（八月三日付『Progressive』）や京都精華大学のレベッカ・ジェニスン教授（八月二〇日付『International Examiner』）らの執筆した海外メディアへの寄稿記事も掲載されました。

また、寄付活動の拡大を視野に入れ、三月には米国を基点とするクラウドファンディングのサイト「グローバルギビング」に登録しました。このサイトからの寄付は、米国と英国で税額控除の対象となります。早速、美術館紹介映像を製作するプロジェクトへの寄付を呼びかけたところ、約一カ月で一万ドルを突破。その後は「原爆の図保存基金」の英語版も立ち上げています。こうした寄付の呼びかけには、米国だけでなく、アジア、ヨーロッパなど世界各地の幅広い層からメッセージや支援が届いています。

◆考察・今後の展望・課題

こうした取り組みは人びとの関心を集め、SNSを通じて情報が拡散されました。また、新聞、雑誌、ラジオ、テレビなどのマスメディアの取材も数多く受けました。その理由としては、コロナ禍という危機や、被爆七五年において「記憶の継承」が注目されている社会状況が挙げられます。「原爆の図」や丸木美術館（という歴史的なイメージの強い作品や場所）が、若い世代の参入によってインターネットメディアを活用している意外性もニュース的な価値を高めたのでしょう。

今後は一過性の話題に終わらず、継続的に運営基盤を安定させる仕組みづくりが必要となります。そのためには、美術館の存続を願う人たちへの情報発信、連携の強化が不可欠です。また、新たな層の支持を獲得するためのイメージづくりにも着手したいところです。

美術館運営を支えるための「マンスリーサポーター」制度もはじまります。日常的に丸木美術館に関心を寄せ、継続して運営を支援してくれる仲間たちを国際的に増やしつつ、実際に丸木美術館まで足を運び、「原爆の図」の前に立つという体験を一人でも多くの方にしていただくために、今後もさまざまな工夫を凝らしていきたいと思っています。

（岡村幸宣・丸木美術館専務理事、岩崎由美子・国際コーディネーター）

臨時休館と緊急支援に関する主な報道

4/24 東京新聞埼玉　「原爆の図」記憶継承に黄信号
5/4 朝日新聞　「原爆の図」美術館 存続危機
5/5 埼玉新聞　丸木美術館 存続の危機
5/5 テレビ埼玉　新型コロナ影響で記憶継承に影…
5/9 信濃毎日新聞など（共同通信配信）
　「原爆の図」継承危機 寄付サイト立ち上げ
5/21 毎日新聞夕刊　丸木美術館緊急寄付を呼びかけ
6/9 NHK 総合 TV 「原爆の図」所蔵美術館再開
6/9 朝日新聞夕刊　原爆の図 他者への痛みの扉
6/9 東京新聞夕刊　人と人 つながり次代へ
6/9 毎日新聞夕刊　生きる喜び 開く
6/24 NHK 国際放送 Reaching Beyond Borders to Save Famed A-Bomb art
7/27 河北新報など（共同通信配信）
　「原爆の図」残したい 存続へ寄付 5000 万円超
8/3 Progressive　Anguish in Human Form
8/3 Kyodo News　Japanese gallery campaigns to share iconic A-bomb paintings worldwide
8/5 NHK ラジオ第 1 放送「N らじ」
　“原爆の図” から生まれた場づくりの可能性
8/6 LA Times 75 years after the Hiroshima bomb, a wife and husband's art still devastates
8/8 埼玉新聞　「命思う場」次代へ
8/10 岩手日報など（時事通信配信）
　「原爆の図」丸木美術館支援 5000 人
8/13 NHK ラジオ第 1 放送「ラジオ深夜便」
　命思う場を守りたい～オンラインでつながる平和への願い
8/15 NHK 総合 TV「おはよう日本」原爆の図が伝える記憶
8/20 International Examiner
　Revisiting the Hiroshima Panels 75 years later
8/21 日本経済新聞　「平和を守る」草の根の思い

マンスリーサポーターを募集します

原爆の図丸木美術館は 1967 年の創立以来、全国の皆様の温かいご協力に支えられて維持運営を続けてまいりました。作品の保存管理、画業の整理・研究など多くの課題を抱えながらですが、世界に誇る平和美術館としてより多くの人々と結びつき、維持発展して行きたいと思っています。

どうぞ、一人でも多く「マンスリーサポーター」にご参加いただき、丸木美術館を未来に繋げてください。

丸木美術館が直面する最大の課題は、建物の老朽化です。温湿度調整の環境が整っておらず、虫食いや紫外線による作品の痛みも進んでいます。また2019年夏の大雨の際には館内の雨漏り、浸水被害がありました。展示保存に適した新館の建設をする必要性から、2017 年の開館 50 周年の節目に「原爆の図保存基金」を立ち上げ、資金が集まり次第の改築を計画しています。

2020 年春には新型コロナウィルスの流行から、約 2 か月間の休館を余儀なくされました。6 月には再開館いたしましたが、団体等の入館者数の回復はすぐには見込めない状況です。このような事態の中、全国から沢山の緊急支援募金が寄せられ、入館料減の経営危機を乗り越えることができたことは大きな支えとなりました。

しかしこの先も新型コロナウイルス感染症の流行がどうなるか不明であり、再び休館の可能性があるかもしれません。さらに新館建設着工の際にはまた入館料が見込めない期間が続くことになります。この様な状況下で美術館を未来へと遺し継続していくために、多くの方の継続的な応援・ご協力をお願いしたく、マンスリーサポーターを募集することにいたしました。

丸木夫妻の作品と、平和への想いを次の世代に繋げていくために、美術館の維持運営を支えるマンスリーサポーターへのご入会をどうぞよろしくお願いいたします。

お申し込みはこちらから→　https://www.congrant.com/project/marukigallery/1408

マンスリーサポーターになると

【毎月定額のクレジットカード引き落とし】

月々 1000 円、2000 円、3000 円、5000 円、10000 円からご選択いただけます。領収書は年 1 回、PDF データでお送りいたします。

（郵送をご希望の場合は申込時のコメント欄にご記入ください）

※原爆の図丸木美術館は公益財団法人の認可を受けています。

　丸木美術館へのご支援は、税額控除の対象となります。

【特典】

●マンスリーサポーターは入館料無料とさせていただきます。

●丸木美術館ニュースを年 3－4 回、Email にてお届けします。

『妣たちの国へ　原爆の図２０２０』(仮題)
「原爆の図」バーチャルツアー映像製作中

六月より米国を基点とするクラウドファンディングサイト「グローバル・ギビング」を活用し、「原爆の図」バーチャルツアー映像を製作するプロジェクトのための寄付を国際的に募集しています。九月末現在、一万一三八五ドル（約一二〇万円）が集まりました。

映像詩『オシラ鏡』（二〇一八年）でサレルノ国際映画祭短編部門最高賞を受賞した写真家・映像作家の新井卓さんに映像製作を依頼し、すでに撮影、編集作業が進んでいます。順調にいけば二〇二一年はじめには公開できる予定になっています。

この映像作品には日本語・英語の字幕が入る予定で、インターネットを通じて広く国際的に観ていただけるよう活用します。物語形式の映像ですので、丸木美術館を知らない方にも興味を持っていただき、より多くの方々と「原爆の図」の世界を共有することを目的にしています。どうぞご期待ください。

グローバル・ギビングのウェブサイトはこちら。英語サイトですが、日本からでも寄付できます。
https://www.globalgiving.org/projects/virtual-tours-hiroshima-panels/

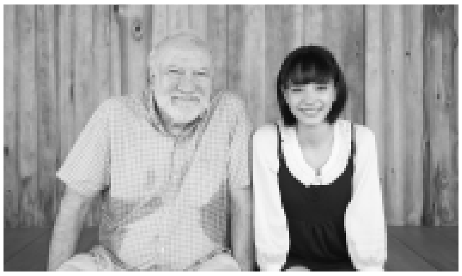
主人公のユキナ（田所千愛）は、日本とブラジルにルーツをもつ高校生。ある夏の日、思い立って、ひとりで丸木美術館を訪れ、「原爆の図」の前に立つ。
映像の鑑賞者は、彼女とともに「原爆の図」を見たり、関係者の話を聞いたりという疑似体験をすることになる。
写真は、「原爆の図」を見つめるユキナ（上）。丸木位里、丸木俊のアトリエとして使われた小高文庫では、俊の姪で絵本作家の丸木ひさ子さんと出会う（右）。

新井卓監督からのメッセージ

原爆の図丸木美術館バーチャルツアー製作へのご支援ありがとうございます。本作は、よくある拡張現実（ＡＲ）による仮想体験ではなく、一七歳の主人公・ユキナの物語を通して丸木美術館を訪問する映画的表現を目指しています。

本作は主に四つのパートで構成されます。（一）主人公と丸木美術館ゆかりの表現者たちとの出会い（二）それぞれの「原爆の図」から着想した膨らませた幻想シーン（三）丸木美術館関係者のインタビュー（四）「原爆の図」の高精細映像

私は丸木美術館をはじめて訪れた時のことを、鮮明に覚えています。夏の日、駅から四〇分かけて歩き、ふと目の前に開けた都幾川の風景に心を奪われました。長い年月をかけて増築された不思議な美術館に入ると、手の届く距離に、「原爆の図」が並んでいます。丸木美術との出会いは、単なる絵画鑑賞ではなく身体的、感情的に揺さぶられる立体的な体験だと思います。本作がその体験の一端に触れる機会となり、いつか実際に訪問してくださる日に繋がることを願っています。



写真は映画監督のジャン・ユンカーマンさんとユキナ（上）、歌手のイルマ・オスノさんと娘のクシさん（中）、美術家の風間サチコさんら（下）。

丸木夫妻の作品を未来に伝える
――保存修復の必要性

後藤　秀聖　ごとう しゅうせい

「介入」せず裏から支える修復

私は学生時代、日本の絵画修復の第一人者だった山領まりさんの「修復家という仕事」という特別講義を受けたことがあります。山領さんは一九六〇年代から五〇年以上にわたって、日本国内の美術館で保存修復に携わってきた方で、講義はご自身が修復家を目指したきっかけ、修復の今までとこれからについて話されていました。特に晩年は長野県上田市にある無言館が収蔵する戦没画学生の作品の修復作業を精力的に行っていました。

一般的に絵画の「修復」というと、作品に付着したホコリや汚れを落とすクリーニング、オリジナルの色の復元を行います。また一方では、絵肌の表面にあるキズを目立たなくして、描かれた当時のピカピカな状態に甦らせるようなイメージを持たれるそうです。実際に、作品の美観を損なう絵具の剥離箇所に加筆や補彩をするといったリタッチ処置を行うこともあるそうです。確かに修復は「物を直す」仕事ではありません。しかし山領さんは、むしろ「現状をあまり変えずに、絵の劣化が遅れるように手助けをする立場」で修復をしたい。無言館の作品のなかには無残なキズ跡が目立つものもありますが、加筆のように「介入」するといった形ではない、「時代の証言者としての亀裂を見ながら、絵具がこぼれ落ちないように、裏から支えるような修復に徹していきたい」と語っていました。

時代の証言者ともいえる剥落

原爆の図丸木美術館に展示されている丸木位里、丸木俊夫妻の作品の前に立ち、修復の必要性などを考えているとき、私のなかでは山領さんから聞いたお話の数々が思い出されます。

夫妻は生涯にわたり、お互いの異なる日本画と洋画、「水と油」の表現技法を、ひとつの作品画面上に踏襲し、あらゆる歴史の惨禍と人びとの姿を描き尽くそうとしました。丸木美術館に常設展示している「原爆の図」連作、《南京大虐殺の図》や《アウシュビッツの図》、《水俣の図》、《水俣・原発・三里塚》などは、制作から数十年の歳月を経ています。そのため、絵具には「時代の証言者」ともいえる剥離剥落や汚れが目立ちはじめています。

修復処置の方法を探る

今年に入り、美術館には保存修復の専門家の方々が訪問し、作品の状態を調査し、適切かつ有効な保存方法、損傷箇所の修復処置などを探っています。また夫妻の芸術表現への理解を深めながら、作品を見つめ直す時間を絶えず続けています。

二〇一七年に立ち上げた「原爆の図保存基金」の事業では、老朽化した丸木美術館の改修工事の計画を進めています。リニューアル後の美術館が果たす役割には、近年の多様な災害への対策を講じ、作品を永く保存するために展示・収蔵環境の改善と管理から修復方法までを構築するという命題があります。

現在も丸木美術館に来れば夫妻の作品を見ることができるのは、開館当初から市民一人ひとりの力に支えられてきたからにほかなりません。

作品を未来に伝える活動を「裏から支えるような」保存修復の必要性を考えていきたいと思います。

（丸木美術館特任研究員）

原爆の図第3部《水》を調査する愛知県立芸術大学文化財保存修復研究所の皆さん（９月30日）。

連載第九回　位里のこと、俊のこと

丸木 ひさ子　まるき ひさこ

前回からまた、三カ月が経ちました。皆様、お元気でしょうか？お盆の夏休み、丸木美術館は賑わいを取り戻しました。入口の細い道を来る人（車）帰る人（車）が鉢合わせして交通整理をするほどでした。人がたくさんいるって良いですね。

さて、今回もまた「位里のこと俊のこと」です。館外展のお知らせにもありますように位里展が奥田元宋・小由女美術館、一宮市三岸節子記念美術館、富山県水墨美術館の三館で巡回されています。奥田元宋・小由女美術館は終わってしまい、三岸節子記念美術館は一〇月一一日まで、富山県水墨美術館は一一月これからです。展覧会には代表作はもちろんのこと、世に出ていなかった作品や、記録はあるがどこへ行ってしまったか行方知れずの作品がこのたび発掘され展示されています。各館の地道なご尽力により位里の若い頃の歴史が上書き更新されました。

絵には誠実であった位里

私が驚くのは位里が一九二〇年代にごく普通の美人画と吉祥画題の鶴を描いていたことです。写実でとても丁寧です。これは同郷の権威はあるがそれほど好きでもない師匠のもとで基礎を学んでいた頃の作とのこと。力のある師匠の下にいればいいことがあるかもしれないという下心もあったらしいです。二〇年代は画家人生を歩みだした時、勉強嫌いの位里も絵に関しては誠実であったという証。紙、絹、墨、絵の具、膠、どうさ、筆日本画の基本を身に着けたのだと思います。

私は、七〇年代からの位里しか知らない。その頃の位里はというと雄鶏よりも早く起き庭を歩きまわっている。敷地内に作った竪穴住居で火をおこし、静かに酒を飲んでいる。そこへイタチが足元にやってくる。位里はテレビを見ながらしょっちゅう居眠りをしている。共同制作以外絵を描く姿を見たことがなかったし、スケッチ旅行での山、瀧、海を描くときは早かった。はい次、はい次と新しい紙をセットする方が忙しかった。

《桜美人画》と《双鶴図》。ここから、位里を位里たらしめた三〇年代四〇年代に向かうことを思うとロマンを感じる。水墨の前衛を思う時、二〇年代はやはりこの絵でなければならぬと思う。

若者よ鍛錬せよ！

俊はというと真面目で勉強家であることは位里も認めたところで言うに及ばずだが、絵の修行と関係あるかないかは別として俊は宮本武蔵が好きだった。何故好き？と私も聞くとよかったのだが、そこが悲しさ、聞いていない。

武蔵は六〇回もの果たし合いをして勝っている。これは、命こそ宝と考えた場合前に進めない。生きるか死ぬかの、真剣勝負において俊は武蔵に惹かれたと思ってほしい。俊も紙に向かって真剣勝負をした。筆先あるいは鉛筆に全神経を集中する。気分は武蔵だったのだろう。

真剣に挑むことは、女子美術専門学校時代の昼夜銀行前での、似顔絵かきから始まっていたのではないか。金をいただくのである。切った張ったの空気である。左目を描く。よし、命はもらった。フーっと息を吐く。最初の左目が肝心。これさえできればあとはうまくいく。と言っていた。

俊の「宮本武蔵」（吉川英治ではなく研究本だったと思う）の本には付箋がいっぱいついていた。俊が死んでいつのまにかその本もそれきり行方不明になってしまった。野木庵の鴨居には木刀がかけてあった。曲者が来るとやっつけるのだそうだ。俊は血の気が多かった。武蔵の水墨画にも感心していた。

先日、ラジオ番組で俊の声を久々に聴いた。千枚デッサンのことを言っていた。懐かしい。千枚描けば突き抜ける。何かが生まれる。学校なんか行くな。個性が取られる。だから、私は弟子を取らない。教えない。「何さ、自分は学校行ったじゃん！」と当時私と丸木美術館の若者は言ったものだ。

位里も俊も結局同じ。若者よ、鍛錬せよ！と言っているような。

（絵本作家）

連載　丸木位里・丸木俊の時代〈第三六回〉

日独伊三国同盟、日ソ中立条約、独ソ開戦。
そして対英米宣戦へ。
暴力と策謀がせめぎあい、国際的な動乱が加速していく。
俊も、その大きな渦の中で生きていた。

日ソ中立条約締結

一九四一年春、日本とソ連のあいだでは、重要な外交交渉が進展していた。モスクワ公使・西春彦の娘の家庭教師である俊にも、不穏な雰囲気は伝わっていた。

その頃軍人の日本大使が赴任して来ました。ソビエトのことはなにもわからないのに、やたらにいばる気の強さで日本の外交官を困らせ、ソビエトに無理をいい困らせている、という評判です。外交官の奥方たちの二派に分れての井戸端会議を耳にしました。
（中略）
春も来ようとする頃であったと思うのです。
『松岡特使（原文ママ）大使来る』
と、大使館は色めきたちました。
私にはくわしいことはわかりませんでしたが、松岡の車はモスコウのゴーストップを無視して走っている。駅頭にスターリンが迎えたが松岡はスターリンに飛びついてキッスした。その足で松岡はボルショイ（ママ）劇場の観劇の休み時間に、ドイツの外交官とも話し合っていた、というようなささやきが廊下の隅の立ち話から、聞こえるともなく聞えるのです。私は、日本をつかさどるえらい人といわれている人たちは、一体、何をしよう、としているのだろう、と考えるのでした。
そのうちに、
『日ソ不可侵（原文ママ）条約締結』
と、大騒ぎになりました。
（丸木俊子『生々流転』、実業之日本社、一九五八年）

俊が「軍人大使」と厳しく批判している建川美次[※1]駐ソ大使は、一九四〇年一〇月にモスクワに赴任していた。ただ、建川に随行した西は、自著『回想の日本外交』（岩波新書、一九六五年）に、「建川大使は満州事変ごろからソ連膺懲論者であったが、松岡外交のころは、すっかり日ソ親善論者になっていたのである」と記している。西の回想によれば、建川は着任後間もなくモロトフ外相に日ソ不可侵条約の締結を申し入れたが、モロトフから南樺太と千島の領土問題を解決するのが先だと返答され、中立条約なら締結してもよい、と提案されたという。

もう一人の松岡洋右[※2]は外務大臣で、前年九月に成立した日独伊三国軍事同盟成立を祝すという名目で、一九四一年三月にドイツとイタリアを訪問する旅に出ていた。

独ソ関係が急速に悪化している時期だったが、松岡は三月一五日にまずモスクワでスターリンと会談して「日本は神代の時代から共産主義だというような大風呂敷をひろげ」、二七日にはヒトラーと、四月一日にはムッソリーニと会見した。そして帰路に再びモスクワへ立ち寄って、モロトフと交渉を行った。

赤松俊子モスクワスケッチNo.222　鉛筆、彩色　丸木ひさ子氏蔵
宿舎のモロゾフ邸を描いたと思われる

松岡は、ドイツがソ連を攻撃するだろうかと迷っていたようだが、結局、「北樺太利権の解消も自分は賛成する、しかし自分だけでは決められないから、帰国してから閣僚を説得する、という一札を入れて」日ソ中立条約を結んだ。西は、もし松岡が利権解消に応じず交渉の席を立っていれば、ソ連側から利権は解消しなくても条約を締結すると言ってきたかもしれない、と記している。

ともあれ、ソ連側は中立条約の締結を喜び、松岡が調印日の夕方に帰国のためモスクワ駅に着いた際には、スターリンとモロトフがわざわざ見送りに来て、双方酔ったままキスと抱擁を繰り返したという逸話も伝わっている。

※１建川美次（たてかわ・よしつぐ）：新潟県出身の陸軍軍人、外交官。日露戦争で活躍、満州事変において関東軍の謀略を黙認したことでも知られる。

条約締結パーティ

日ソ中立条約が締結したのは一九四一年四月一三日。

　俊が建川邸で開催された記念パーティに出席したのは、その当日のことだろうか。もう一人の年とった家庭教師の先生と二人で大使館じゅうの子供を連れて大使の邸宅に参集した、と回想している。

　宴会の最中には、モスクワ放送によってロシア語の条約文全文の朗読が放送され、続いて美しい日本語の全文朗読も流れた。岡田嘉子さんにちがいない、というささやきが聞こえたそうだが、俊は後に『生々流

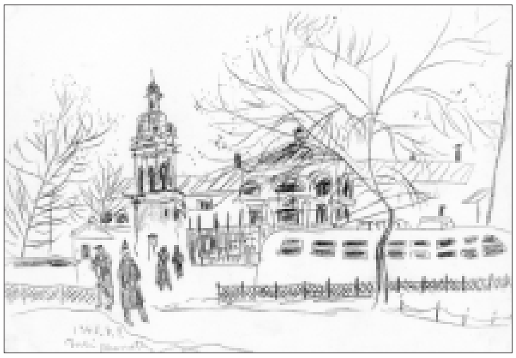
モスクワ　アパートへ向かう並木道
赤松俊子（丸木俊）　1941年　油彩　原爆の図丸木美術館蔵

転』を改訂し刊行した『女絵かきの誕生』（朝日新聞社、一九七七年、現在は日本図書センターより刊行）で、朗読者が片山潜の娘の片山やすであったと付記している。

**　宴もたけなわの頃、ちょうど私たち教師と子供の席には酒はなく、のり巻きなどを頂戴していました。その私たちの席のすぐそばが日本の軍人大使建川と松岡特使大使の席でした。**

**　大変に酔っぱらった松岡大使は建川大使の肩をたたいて**

『おい、わしが満州に居る時、お前に二十五万円やったではないか』といいました。私はびっくりしてあたりを見廻した程です。私の月給が三十七円五十銭でした。その時は



赤松俊子モスクワスケッチNo.263
1941年4月7日　鉛筆　丸木ひさ子氏蔵

百円にあがっていましたが。二十五万円という大金を、やったではないか、とやすやすといって、しかも、私たち子供や教師の居るそばでそんな話は言語道断、と、考えていますと、会も終りに近づき、大使はお祝いの握手に一人一人のところにやって来ました。子供たちにもみんな同じように握手を賜りました。

『子供の健全な教育を頼みましたぞ』

**　と、松岡大使は私の手を握りました。さっき軍人大使の肩をたたいた手です。私はなんとなくしりごみして、手を引っこめたくなりました。**

（『生々流転』）

　西の回想には「建川駐ソ大使は松岡さんと満州事変以来の友だちと見られた。しかしほんとうの友だちであったかどうかは、疑問である。松岡さんがモスクワで酔っぱらって、僕は満鉄時代には建川には十万円やったんだよと言ったことがあるが、あまり心を許し合った友だちではなかったようだ」という記述がある。

　その西も、通商条約の交渉においてソ連に譲歩的な姿勢を続ける建川と意見があわなくなり、「陸軍の外務人事に対する干渉の匂いを察知」して、五月には辞表を提出することになった。そして、わずか一週間で荷造りをすませて、家族とともに日本に引きあげた。年長の娘の喜代子は絵の勉強のためにパリへ行き、俊は年少の娘の美代子について西夫妻とともに帰国した。現存するスケッチの日付から、河南丸に乗ってウラジオストックを出航したのは一九四一年六月二日頃と推測される。

　そして六月二二日にはドイツがソ連に侵攻し、独ソ戦がはじまる。

　あらためて俊のモスクワスケッチを見なおすと、油彩《モスクワ　アパートへ向かう並木道》のもとになったと思われる鉛筆画など、わずかな例外を除き、一九四一年のモスクワ滞在では街の絵を描いていないことに気づく。人物、室内風景、舞台・劇場のスケッチばかりである。

　俊は「中国に戦争をしかけた日本、それは東から攻めこむ東洋の鬼なのでした」（『流々遍歴』、『女絵かきの誕生』では削除）と肌で感じた雰囲気を書き留めているが、一九三七年の最初のモスクワ滞在からわずか三年ほどで、日本人が気軽に街頭でスケッチできるような国際情勢ではなくなっていたことが、残された絵からも想像できる。

　東京に戻ると、俊のアトリエには一通の展覧会案内状が届いていた。

（岡村幸宣・丸木美術館学芸員）【続】

※2松岡洋右（まつおか・ようすけ）：山口県出身の政治家。国際連盟特別総会で脱退を宣言。満鉄総裁などを務める。敗戦後、A級戦犯として起訴されたが病没。

新評議員・理事・監事選任のお知らせ

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、七月二〇日付書面決議による評議員会を開催した結果、左記のように丸木美術館の新評議員、理事、監事が決定しました。評議員の任期は四年、理事、監事の任期は二年となります。

また、七月二一日にはオンラインによる理事会が開催され、代表理事（理事長）を退任した小寺隆幸氏に代わり、鶴田雅英氏が新たに選出されました。

【評議員】
▽青木明兄▽石川雷太▽草薙静子▽楠本峰生▽檜よしえ▽藤川泰志▽村山祐太▽森田睦子▽両岡健太▽吉川眞理子
【理事】
▽鵜飼哲▽岡野一郎（副理事長）▽岡村幸宣（専務理事）▽小寺隆幸（副理事長）▽杉田明宏▽鶴田雅英（代表理事＝理事長）▽浜地稔（業務執行理事）▽万年山えつ子▽丸木伸里（業務執行理事）▽満園節子（業務執行理事）
【監事】
▽飯島啓史▽野口悦子

代表理事就任のあいさつ

丸木美術館を支えていただいているみなさまへ

「原爆の図」を絵画として再評価する流れは大きな流れになりつつあります。同時にそれは狭いアートシーンで評価されるということを超えて、絵画、あるいはアートがもつ潜性力の評価につながる可能性も示唆しているように感じます。そのような状況の中で丸木美術館が果たすべき役割は時代とともに問い直し続けなければならないのでしょう。

そんなことを考えていますが、このたび代表理事に就任することになりました。「ぼくでいいのかなぁ」という自覚はいまでも明確にありますが（笑）、それを忘れないようにしつつ、しかし、最大限の努力をさせていただきたいと思っています。よろしくお願いします。

美術館を支えていただいているみなさんには、できるだけお会いして、直接お話を聞ければと思っています。私が美術館に行く日は少ないのですが、声をかけてもらえれば可能な範囲で調整したいと思います。私宛に、直接メール（duruta@gmail.com）してください。

繰り返しになりますが、私が代表理事にむいているとは思えません。しかし、とても苦労して美術館の経営をここまで安定させた小寺前理事長にはこれ以上無理も言えません。とはいえ、代表理事は必要なのでほんとうに僭越ですが引き受けることになりました。

こんな私が代表理事に就任するということの意味を考えました。それは丸木美術館が成長したということではないか、私が代表理事に就任しても美術館は安定して運営していけるような体制が築かれつつあるということの証左であるとも言えるのではないか、とも思うのです。事務局体制の成熟に感謝しています。

そんなわけで、頼りない代表理事が誕生し、これは美術館の成長をあらわしていると書きましたが、他にも肯定的なことがあります。一人でも多くのみなさんに具体的に美術館を応援してもらうことが必要になっているということです。その支えがあれば、丸木美術館はいま以上に世界に発信していくことができる可能性を持っていると思います。

みなさんが「協力しなければ」と思えるよう仕事をしたいと思っています。よろしくお願いします。

追記　安倍政権は終わったものの、それを継承する菅首相が就任しました。核兵器禁止条約をめぐる日本政府の対応は失望以外のなにものでもないという状況が続いていたのですが、これが継承されないよう動きを強めていく必要も感じています。

（鶴田雅英・丸木美術館理事長）

退任のご挨拶

二〇〇六年に水原孝前理事長の後を継いでから一四年、今振り返ると、丸木夫妻なきあと、この美術館をどうやって未来に引き継ぐのかと模索する日々でした。公益財団法人へと一歩進めることはできましたが、入館者の減少による財政的逼迫の中で事務局の欠員も補えず、将来の展望を語るどころではありませんでした。しかし二〇一一年三月一一日を機に、核も原発もない世界を希求する多くの方々の熱い想いが美術館に寄せられました。「原爆の図アメリカ展」も皆様に支えられて実現し、さらに「原爆の図」を守るための募金も世界に広がろうとしています。そして私たちは今、美術館の将来の夢を語り、それにふさわしい改築プランを具体化するところまで来ています。そういうときに、今後を担う一回り若い世代にバトンタッチすることをうれしく思います。私自身ももちろん今後も一緒にやっていきます。

（小寺隆幸・丸木美術館副理事長）

丸木美術館 情報ページ

館外展・企画

生命のリアリズム　珠玉の日本画
一〇月一〇日(土)～一二月二〇日(日)
神奈川県立近代美術館 葉山
(神奈川県三浦郡葉山町一色)
位里《松韻》、スマ《簪》出品

広島市現代美術館所蔵作品を中心に
Part1：曖光と同時代の仲間たち
一〇月一〇日(土)～一二月一三日(日)
大川美術館(群馬県桐生市小曽根町)
位里《鷺》など四点出品

墨は流すもの　丸木位里の宇宙
一一月一三日(金)～一二月二七日(日)
富山県水墨美術館(富山市五福)
対談「丸木位里の画業について」
一一月二一日(土)午後二時
岡村幸宣(丸木美術館学芸員)
永井明生(ふくやま美術館学芸担当次長)
定員三〇名(先着順)

第六八回全国博物館大会
一一月二五日(水)～二六日(木)
横浜市開港記念会館
(神奈川県横浜市中区本町)
分科会「コロナ時代の新しい博物館像」
一一月二六日(木)午前九時半
報告：岡村幸宣(丸木美術館学芸員)
「コロナ禍における経営危機」
申込問合せ：日本博物館協会
電話：03(5832)9108
メール：webmaster@j-muse.or.jp

広島市現代美術館所蔵作品を中心に
Part2：70年目の原爆の図
一月一六日(土)～三月一四日(日)
大川美術館(群馬県桐生市小曽根町)
「原爆の図デッサン」など出品

新刊のお知らせ

『赤松俊子の描いた南洋群島』
ニホンバレ発行　一五〇〇円(税込)

海洋生物学者の故・倉田洋二さんが、赤松俊子(丸木俊)が一九四〇年に滞在した「南洋群島」パラオ、ヤップ島で描いたスケッチについて解説した内容を、精神科医の諸川由実代さんの熱意でまとめた一冊。日英併記。

原爆の図保存基金報告

原爆の図保存基金は、九月二五日現在、五八四九件の方々にご協力いただき、**一億三八〇五万五二七六円**となっています。引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。

【郵便振替口座】
名称：原爆の図保存基金
番号記号：00260-6-138290
※他金融機関からのお振込の場合
(別途メールで連絡先を通知下さい)
名称：原爆の図保存基金
店番：〇二九(ゼロニキユウ)店(029)
預金種目：当座
口座番号：0138290

Relay Essay
リレー・エッセイ Vol.73

飯島 啓史
丸木美術館監事

私は、現在、比企教職員組合(日教組埼玉、以下比企教組)の専門委員として、組合活動をサポートしています。私が丸木美術館を初めて訪れたのは、比企地区内の中学校の教員になって1年後で、組合員として参加した8月6日の原爆慰霊祭の日でした。学生時代から丸木美術館については知っていましたが、今まで訪れたことはありませんでした。実際に、目の前で「原爆の図」を見たとき、その生々しさに衝撃を受け、改めて反戦の思いを心に刻んだことを覚えています。比企教組と丸木美術館は、丸木夫妻が東松山市に移住し、1967年に美術館を開設した当初から、比企教組の先輩たちがいろいろな面で協力関係を築いてきました。そして、その流れは今も続いています。現在、私たち比企教組は、「教え子を再び戦場に送るな」というスローガンを活動の原点にし、組織的に美術館の活動支援をしています。毎年、8月6日の原爆慰霊祭には多くの組合員が美術館に集まり、反戦平和を願っています。

私たちは、地元に丸木美術館があることを誇りに思い、活動方針の中に美術館支援を取り入れ、平和教育の教材として作品を見せることによって、子どもたちに平和の大切さを意識させる活動をしてきました。しかし、年々、教育現場では平和教育への取り組みが難しくなってきている現状があります。多くの教職員に組合活動を通して再度、平和教育の重要性を意識してもらい、子どもたちに平和の大切さを伝えて欲しいと思っています。

これからも平和・人権・環境を守る砦として丸木美術館を位置づけ、私たちの運動が更に前進していくためにも、美術館を支援し、連帯していきたいと考えています。

最後に、今年から、丸木美術館の監事になりました。監事として仕事がこなせるか不安も多々ありますが、美術館の更なる発展のために頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

写真で見る 丸木美術館の日常風景

（撮影・構成：山口和彦）

8月6日　原爆の図第14部《からす》の前で、オンラインで韓国の学生と語り合う、自由の森学園の教員と生徒たち

7月18日　取材に来ていたNHKの撮影班がクヌギの木にカブトムシを発見

8月6日　都幾川にて、とうろうを流す子どもたち

8月6日　毎年「ひろしま忌」に原爆観音堂へ供花を下さる「花一」の小柳さん

8月27日　「原爆の図」バーチャルツアー映像を撮影する新井卓さんたちスタッフと出演者の皆さん

8月6日　近所の乗馬クラブの皆さん、美術館の前でひと休み

テレビ放送のお知らせ

一〇月一八日(日)午前六時一〇分よりNHK総合テレビ「目撃！にっぽん」で、丸木美術館が取り上げられます。新型コロナウイルス感染症の影響を受けた被爆七五年の夏。「原爆の図」が伝える記憶と、それを受け止める若者たちの物語に、山口大貴ディレクターが密着しています。

編集後記

▼八月六日の夕方になると、とうろう流しの始まりです。我々回収スタッフは川下で水に浸かって待機し、ゆらゆらと流れてくる灯篭を拾い上げます。そして回収が終わり、都幾川でひと泳ぎするのが毎年の恒例行事となっています。（山）

▼葉もほとんど落ちた桜の木に、青々とした葉と白い花がポツポツと。「狂い咲き」に驚きましたが、秋空に咲く桜もかわいらしいです。（実）

▼今まで当たり前に思っていたことが、当たり前でなくなっていく現実。見えない脅威に向き合うことの難しさを、あらためて感じています。一時は開催不可能かと思われた「丸木位里の宇宙」展も、各館関係者の皆さまのご尽力によって、最後の富山会場まで無事に巡回することができそうです。充実の図録は、丸木美術館でも販売しています。（岡）